

みんなの支援で 一歩ずつ前進を

全国から宮崎県農民組合連合会に届いた義援金を6月30日・7月2日、口蹄疫ワクチンの接種により殺処分された組合員のみなさんに、義援金と激励メッセージを届けました。

西都市の繁殖農家(母牛:約30頭・仔牛:約20頭)は、「みなさんに迷惑をかけて本当にすみません。ありがとうございます」と涙を親指で拭きながら話されました。「ワクチンを打ってからがながく、殺処分が行われるまでは、死刑囚になったような気分で、朝起きれば吐き気がする日が続いた」と辛そうに、カラの牛舎を見ながら「こんなに静かで牛の鳴き声が聞こえない。こんな日が来るとは夢にも思わなかった。」と話されました。「みなさんの『がんばってね』って言葉がはじめは辛くて、最近やっと慣れてきました。もう少し落ち着いたところで、再建に向けて頑張っていきます」と少し微笑みながら話されました。



牛を見送る組合員の様子

高鍋町の繁殖農家(母牛9頭・子牛4頭)は、「みなさんが心配して下さって、ありがとうございます。集落の92歳のおばあちゃんが心配して寿司を届けてくださった時は、涙が出ました。」と話されました。そして、同じ集落の方が、「明日は、もう牛たちがいなくなるから」と写真を撮ってくれたそうです。その写真を見せて頂きましたが、キラキラと輝く牛の姿や、埋却地に運ばれる所まで撮ってありました。

「牛は自分の死を悟るといふが、本当でした。普通は私が牛舎の前を通ると“モー、モー”って鳴くけど、その日がまったく鳴かなかった」と目を真っ赤にし、「夫が退職して、やっと二人でのんびりと農業をやっていく夢を奪われました」と話されました。「牛の再建はすぐには出来ないけど、米や野菜作りは続けながら頑張っていきたい」と話されました。

現地の農家は、今も口蹄疫ウイルスを媒介してはならないと、外出や訪問を極力差し控えています。そのため隣近所との交流もままならず、農家は孤立し、たいへんな不安を抱えています。

ネットワークは、今後も、口蹄疫で苦悩する県民を激励しながら、要求実現に向けてたたかっていきます。